慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本原始文化(三森定男著, 四海書房版)
Sub Title	
Author	清水, 潤三(Shimizu, Junzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1942
Jtitle	史学 Vol.21, No.1 (1942. 9) ,p.119- 120
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19420900-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

くべき手腕を以て、短文の中に餘さず織り込まれて居る。

以上述べた如く、本書は鬼才森本氏の擧げられた學的成果の結晶であり、優れた見解と有益なる示唆に富み、敎へられる所が頗る多いのである。更に特筆すべきは全篇を通じて流れる、溢れるばかりの詩情であつて、これは氏の學を多彩ならしめると共に、讀者を魅了せずにおかぬ所以であり、我々は氏の天資豐なりしことを羨まずには居られない。又その故に本書は一般の人々にも、限りなき興味をもつて愛讀されること疑なく、啓蒙の書としても高く評價さるべきである、と信ずる。かく比類少き好著として敢て諸賢の一讀をお奬めする次第である。（清水潤三）

日本原始文化（三森定男著　四海書房版）

我國考古學界に於て最も缺けたる部分の一に高級な概說書の乏しい點が擧げられる。繩文式文化に關しては、古く中谷治宇二郎氏の〃日本石器時代提要〃の名著があるが、殆んど手に入り難く、特に彌生式文化以降には絕無と云つてよい。此の度三森定男氏が、自己の研究を纏める意圖を以て著はされた本書は、此の意味に於て、意義深きものと云はねばならない。三森氏は京都帝國大學に於て、親しく故濱田耕作敎授の薰陶を受け、我國の原始文化を研鑽された少壯學者である。困難極まる此の種の執筆を敢行された努力に對し、先づ深甚な敬意を表する次第である。

さて次に內容を紹介し、併せて忌憚なき批評を加へさせていたゞくことゝする。本書は序章に始まり、日本文化成立の基礎、古代の遺物、住居、聚落、葬制、生活技術、社會と宗敎の七章及び、結びの言葉、より成る。

序章は〃日本原始學の樹立〃と題され、我國古代文化研究の基礎概念が說かれて居る。卽ち考古學の本質を說き、原始時代を定義し、先史時代と神話との關係、或ひは未開社會を解說し、遺物の處理法に及んで居り、異論も多からうが、著者獨特の日本原始學が此處に成立するのである。第一章は日本文化成立の基礎として、我國に人類の出現したのは、遠く洪積世の時代であつたらう、と地質學上の論據より、舊石文化の存在を想定する、特色ある新見解に始り、此の結果當然中石文化の存在をも豫想し、暗に繩文式文化の初期をこれに比定して居られる等正に珍らしき所論と云はねばならない。第二章には遺物の概說がなされて居り、隨所に新しい見解が示されて居る。第一節としては土器が採り上げられ、最初に汎論として、土器の起源、製作、形態、裝飾等が論ぜられ、次いで繩文、彌生兩式土器が細說されて居るが、氏の最も得意とされる所とて、本書の中核をなす感がある。此處には現在一部學者の間に唱へられて居る、煩雜な土器分類の大綱が、要領よく纏められて居り、土器に暗い者が概念を得るには極めて都合がよい。此の中各種繩文式土器が、單に一系統の序列による發展の結果現はれたものではない、とする所論は頗る興味があり、又繩文式土器の使用者が、そのまゝ彌生式土器の使用者であつて、異つた民族に非ず、と强調された所も、最近忘れられやうとして居た、故濱田博士の舊說を、新しき研究によつて復活されたもの、として意義がある。第二篇以下には、石器、骨角器裝身

具、身體加工、青銅器の順に記述が進められ、最後に近來頓に發見例を加へて來た木器に就いて一言されて居るけれども、石器の項を除いては土器に關する程、詳細ではない。

第三章住居の研究も、最近の發見によるよく消化されて、見るべきものが多く、特に第四章に於いて、聚落の一章を設けられた點は注目に價する。聚落の研究は近年に至つて始められたと云つてよく、十分な結果は獲られて居ないが、今後最も留意さるべき研究題目であることは疑ひない。氏が此處に一應在來の成果を整理されたことに感謝するものである。第五章に至つて埋葬の問題が說かれる。本章で注意すべきは氏が彌生式土器使用者が高塚古墳の築造者である、とされたことである。此の見解は氏の獨創ではないが、何としても將來の學界を賑はすに足る重要な問題となるであらう。進んで第六章に於いては生活技術、卽ち生業論がなされて居る。此處でも氏は我國に於いて、舊石、中石、新石、といふ文化の發展が見られたことを前提として、筆を進められたのである。なほ生業を論ぜられるに當り、此の大問題の極く一小部分にしか觸れずに終つて居られるは殘念である。最後の章は社會と宗敎とが採り上げられて居る。卽ち氏が原始學を以て、遺物に基いて古代の文化を闡明する學とされた結果、此の章が設けられたことは云ふ迄もないが、その內容は極めて雜駁であり、不消化であつて、他の章とは比較にならないのを遺憾とする。

以上氣づいたまゝに、非禮をも顧みず紹介と批評の筆を進めて來たが、要するに本書は、高級な概說書として見るべきものがあり、同時に著者三森氏の倦まざる研究の成果でもあつて、卓拔なる新見解が隨所に溢れ、その個々に就いては遽かに承服出來兼ねるものも多いが、氏の眞面目なる努力に對し、敬意を表さぬ者はあるまい。初學者にとつては稍々新說の提起に急で、誤解を招く懼れ少しとしないが、一應素養ある人々には是非一讀されんことを希望して止まない次第である。（淸水潤三）

七卿回天史（七卿顯彰會編　妙法院門跡發行）

文久三年夏、會津薩摩の兩藩の合同による公武合體派の飛躍は、遂に「八月十八日の政變」となり、尊攘派の公卿等は屛居となり、禁門警固の長州藩兵は堺町御門の守備を解除せしめられるなど、洛中騷然として臨戰の態勢を示したるも、御親兵總督三條實美等の「七卿落」となりて危機を免れ得たのである。七卿は同年より慶應四年に至るまで前後六年間、慘風苦雨流離の間にあつて、艱難と鬪ひ心苦を舐め、屢〻生命の危殆に瀕したるが、一卿の病沒を除きては悉く無事歸落の上、義絕御免となり、維新の大業輔翼の大任を全うし得たことは今更ら記す迄もない。本書は先年妙門に於て嚴修せられた「七卿西走七十年法會」の記念出版として、七卿顯彰會に委囑し、望月茂氏の起稿せられたもので、記述極めて簡明に七卿の心胸面目よく映出し、讀者宛ら當年風雲中に在るが如き感を覺えしめむるものがある。又當時七卿を始め尊攘派有志の屢〻會合の場所となり、又七卿の西走の出發點なりし妙門の宸殿の建物は、一旦破却せしも、先年新に造營せられて舊觀を復し、